

令和6年度第2回環境基本計画策定検討部会 会議録

日 時 令和7年2月27日（木） 午前10時～午前11時35分

場 所 京都市役所本庁舎1階 環境政策局会議室（環境総務課執務室内）

※オンラインとのハイブリッド

出席者 大久保委員◆、尾崎委員、小幡委員、桜井委員、千葉委員◆、山口委員、吉積委員◆
（五十音順）

◆：オンライン出席

1 開 会

中村環境企画部長から挨拶

2 議 題

○環境基本計画策定検討部会の進め方について

- ・ 事務局からの資料1についての説明を踏まえ、意見交換。

（質疑応答なし）

○次期京都市環境基本計画の構成(案)について

- ・ 事務局からの資料2及び別添1・2についての説明を踏まえ、意見交換。

（桜井委員）

次期環境基本計画では、ウェルビーイングに焦点を当てることや、それに関連するものを考えていく方向性であると思う。そのときに、環境とウェルビーイングとの関連性について、わかりやすく整理し、示すことができれば、計画を見ている側も理解がしやすいと思う。例えば、先行研究などを見ると、環境改善が進むとウェルビーイングが高まるという研究結果も出ており、環境に携わることがウェルビーイングに繋がるということをわかりやすく示すことが大事である。主観的指標のアンケートについても、どこまで変えるのか、また変えないのかということもあるが、ウェルビーイングに関連する項目を入れることが良いと思う。環境改善を感じている人ほどウェルビーイングが高いという関連性が見られるような指標・データがあると、その繋がりが示せるとともに、それを京都市でできれば画期的な例になると思う。

（小幡委員）

ウェルビーイングについては第1回検討部会からの検討事項だが、環境との関わりや主観的指標と関連付けることを検討してはどうかということだが事務局いかがか。

（事務局）

現行計画では、主観的指標を通じて環境との関わりやその意識を捉えてきた。その蓄積をもとに、次期計画では桜井委員の提言に近づけるよう、検討を進めたい。

（小幡委員）

ウェルビーイングを計画の中で、このように捉えているということは記載するのか。

（事務局）

ウェルビーイングそのものというよりも、ウェルビーイングを環境との関わりのなかでどう実現するのか、様々な方向から見ることで明らかにすることが必要であると考えている。

（小幡委員）

新京都戦略でもウェルビーイングについて触れているのか。

（事務局）

新京都戦略では、「まち中に夢中になれるものが満ちあふれ、誰もが幸せを感じ、互いにつながり、支え合い、生きがいを持って活躍できるウェルビーイングなまち」ということを掲げている。

（小幡委員）

それを次期計画でも取り上げるということか。

（事務局）

どのようなアプローチ方法にするかということもあるが、新京都戦略とは連動させる。

（桜井委員）

ウェルビーイングは様々な分野で議論されており、私自身、環境とウェルビーイングは密接に関わっていると思うので、その点に関連づけることができ、環境を守ることが幸せに繋がるということを示すことができれば、人々にとって新たなモチベーションになるのではないかと思う。

（小幡委員）

新京都戦略でも大きいウェイトを占めている概念であるため、環境とウェルビーイングとの関連性を次期計画でも書くことによって、見える化を図ることが必要だと思う。

(事務局)

現在検討が進められている長期ビジョンの中でも、見える化についての議論があるため、それとの整合も図りながら打ち出していきたい。

(吉積委員)

現行計画と次期計画を考えたとき、ウェルビーイングが新しい観点となると思う。また、もう一つの重要な観点は観光である。昨今、京都市内には観光客も増え、オーバーツーリズムように悪いイメージで語られることもあるが、その反面、観光客の訪問によって、経済的な活性化にもつながっている。環境・経済・社会の統合を踏まえると、観光という観点も考える必要があると思う。施策の4つの柱について、ウェルビーイングや観光の観点を考えると、このまま4つにするのか、ウェルビーイングなどを盛り込み、少し変えていくのか教えて頂きたい。また、現在収束している新型コロナウイルスの懸念についても、今後も考えられると思う。こうしたことはウェルビーイングを考える背景にもなる。指標に関しては、詳しい議論は今後かもしれないが、ウェルビーイングに関する指標は必要であると思う。また、環境学習については、主体的に学んでいるか、率先して活動しているか、等を問うアンケートが現状できていないと思うので、今後は主体的に環境を意識しているか、また活動しているか、といった指標を加えてはどうか。

(小幡委員)

4つの柱について、ウェルビーイングや観光といった新しい観点があるという現状を踏まえると、変わる可能性があるとも思うがいかがか。

(事務局)

現状はまだ検討のスタートラインであるため、4つの柱に入れ込むことで収まりが悪いというような場合は、その時点で再度考えてきたい。また、ウェルビーイングについては、主観的指標でどこまで達成できているのか、進行管理の中で確かめていくものであると考えている。観光についても、大事な部分であると認識している。後ほどの市民等への意見聴取方法の議題でもご説明するが、その中で観光客がどのような状況下にあるのかデータで量的にお示しする。加えて、旅行業者など観光業界へのヒアリング結果も踏まえ、どのようなアプローチがよいか考えたい。

(小幡委員)

2050年を想定して盛り込む中で、どうしても収まりが悪いという場合は、理念などに書いて整理することが良いと思う。あとはそれぞれの施策の中に関連づけるということが良いと思う。

(千葉委員)

ウェルビーイングと観光が論点であることと、皆様からのご意見について同意する。その他、現行計画から次期計画の間で非常に大きく変わったこととしてAIやテクノロジーの発展があると思う。そのため、サステナブルや環境と新しい技術の融合について、具体的に書かざるを得ないと思う。現行計画でも技術についての記述が出てくるが、その技術が何を指しているのか、どう活用するのかという部分については重きを置いていないように思う。例えば、市民から聴取したデータを施策のなかにどう活用するか、AIの技術をどうスマートシティに繋げるかといった観点があり、具体的にそこまで踏み込む必要はないが、4の柱を見直す際に、ウェルビーイングと観光以外に、技術の観点が必要だと思う。

(小幡委員)

技術の部分について、最新のテクノロジーとサステナブルの関係性について、どこかで触れるのか。

(事務局)

長期ビジョンの審議会でも、技術についてポジティブな形での活用の方向性が議論されており、技術と人間がどう付き合うかという点を言及されようとしている。全体的な認識はあるものの、現時点ではまだどう受け止めるか考えが整理できていないため、今後、検討していきたい。

(小幡委員)

AIの進歩により、2050年の環境が守られるのか、守られないのか、という点も不明であるが、技術の観点は検討して頂きたい。長期ビジョンではどのように検討されているのか。

(事務局)

現行の基本構想は格調高い文章で、まちにおける人間の在り方について、今に至る25年間を対象に述べている。今後策定される長期ビジョンでは、これからの25年の内容となり、その中には地球温暖化や戦争といった世界的な話や、技術についても人間との関わりのなかで大事なものとして検討されている。それらとのマッチはさせて頂きたい。

(大久保委員)

今の議論については、自然がどういう状況かということの見える化や、省エネの取組の見える化など、様々な観点からDXの推進が環境に関わるため、まずその観点から入れ込めると思う。また、オープンデータ化もキーワードとしてあると思う。
資料2について、取組の方向性を2030年と2050年に分けたことは非常に良いことだと思う。さらに、客観的指標は2030年、主観指標は2050年を見据えるということで、ウェルビーイングはすぐに達成されるものでもないため、はっきりとした方向性が

示されていることに好感を持っている。特に京都市はフューチャーデザインなどの手法も取り入れており、本来的には長期というと100年というスパンを指すかもしれないが、現在は長期というと10年から15年くらい先を指し、超長期が50年先と言われているなかで、このような分け方は良いと思う。

資料2構成案の4つ目の項目に記載のある「環境・経済・社会の統合的な課題解決」の部分について、国の環境基本計画ではもう一步進んだ部分となっている。ここで言う統合の意味は、国の環境基本計画では「絶対的デカップリング」という用語を使っており、一般にはわかりにくい用語かもしれないが、経済が成長しても環境負荷が増えない、むしろ減るということを意味している。生物多様性でいうとネイチャーポジティブへの転換であり、経済が成長しても生物多様性自体はマイナスにならず回復することを示している。統合を具体化している今の説明をきちんと位置付け、それを政策目標とすることが良いと思う。

環境像の部分について、総合計画（長期ビジョン）との位置付けを意識して考えられている部分は良いと思う。長期ビジョンは格調高く抽象的な文言を使い、長期をイメージする意味では良いと思う。一方で、気候変動対策として2050年のカーボンニュートラルを目指しているなか、京都駅の開発等を含む京都で進められている比較的新しい開発プロジェクトのハード部分は4、50年先に影響を与えるため、インフラ整備も含めて都市計画や総合計画の内容との関わりが強いと思う。課題の部分に記載のあった温室効果ガス排出量の削減ベースの鈍化については、新しい建物など、インフラ部分への取組を行わないと達成が難しいと思うため、これを議論していくべきだと思う。京都の都市計画においては、景観部分の取組は強いと思うが、景観以外の部分についてどこまで認識しているかということもあり、これらと連携していくことに力を入れた方が良いと思う。これは土地種類別配慮指針にも関連する内容だと思う。

資料2構成案（各項目）P3施策体系について、ウェルビーイングと環境との関わりにご意見があったが、分野別に落としていくにあたって、各分野にどう関連するかを示すことが環境基本計画の役割であると考えている。施策体系のトップの部分で、相互の関係をしっかり記載することが必要であると感じている。

主体別配慮指針については、「絶対的デカップリング」の姿はおそらく一般的に何がそれに当たるのか分かりづらいと思うため、グッドプラクティスのように、このようなことが考えられると言うようなものを通じて事例を示した方が良いのではないかと思う。

進行管理については、環境部局だけで閉じることのないよう、他の部局との連携や情報共有が重要になると思う。事業者の関連で、環境アセスメント（環境影響評価）制度など、仕組みの運用が進行管理では重要になるため、そうした点も入れ込んでいただければと思う。

（小幡委員）

環境・経済・社会の統合について「絶対的デカップリング」の例を入れること、他の部局とインフラ整備や進行管理等に繋がる部分での連携を取ることが必要だというご意見をいただいた。これらについて事務局から発言があればお願いします。

（事務局）

次期計画の中身はこれから詰めていくため、他部局との連携や仕組みの部分で対応する必要があること等を踏まえ検討させていただく。

（小幡委員）

どのように進めるべきか難しいとも思うが、大久保委員から何かアイデアなどはあるか。

（大久保委員）

ひとつひとつクリアしていく必要がある。京都はコミュニティベースで取組が行われてきたこともあって、コミュニティ自体が弱くなってきているという課題はあると思うが、コミュニティベースに落としこんで考える視点も重要だと思う。これは総合計画（長期ビジョン）にも関わるものだと思うが、地域ごとの視点があると身近なものになると思う。

（小幡委員）

デカップリングの例やウェルビーイングと環境の関連をどう整理するか、配慮指針に関わる連携方法など、綺麗にまとめていただかないと複雑になるため、よろしく願いたい。

（山口委員）

資料に掲げられる長期ビジョンの骨子案は、環境政策を考える点でも素晴らしい内容であると感じる。環境とウェルビーイングの部分については人間と深くつながっている視点が大事であると思う。相互に関連しているため、その視点でもって考えることで人間の幸せにつながるのではないかなと思う。AIの問題などもあると思うが、哲学や思想も踏まえて考える必要があると思う。また、将来のビジョンを考えることも重要だが、京都市がこれまで行ってきた環境政策やその実績も発信することで市民の環境への意識を高めていくことになるのではないかなと思う。「DO YOU KYOTO?」など、このようなことをやっているため一緒に頑張ろうというアピールにもなると思う。

○市民等意見聴取方法について

- ・ 事務局からの資料3についての説明を踏まえ、意見交換。

(吉積委員)

ワークショップが重要になると思う。アンケートに比べ、ワークショップは当事者意識をもって自分ごととして考えるきっかけの場にもなるため、どのような企画にするか考える必要がある。私としては、大学のまちということもあり、大学生を巻き込みながら、単に参加者としてだけでなく、企画段階からの参加や、当日のファシリテーションなど、役割も与えながら関わりを持てないかと思っている。具体的にどのようなワークショップとするのか事務局の考えを教えていただきたい。

(事務局)

本資料では、10年前の現行計画策定時の内容を下敷きに掲載している。大学生との関わりの点について、我々としても、大学生にも関わってもらい、継続的に関わりを持てるものがあると良いと考えている。大学生にどのように関わってもらうのか、今回のご意見を踏まえ、具体化していきたい。

(小幡委員)

3回目検討部会が5月に開催される予定で、そのときにワークショップの実施内容の案が出てくるものと思うが、その案に対して5月開催の部会意見を踏まえた修正はスケジュール的に可能なのか。

(事務局)

部会意見を踏まえた企画で実施できるよう進めたい。

(吉積委員)

早めに学生にも声をかけ、企画段階から参画頂けると当事者意識を持つことができるため良いと思う。また、ワークショップも含めて外国からの滞在者の意見も聞くことが必要ではないかと思うので、難しいかもしれないが、多言語での対応などどのようなことが可能か検討していただきたい。

(大久保委員)

パブリックコメントについて、分野別計画との一体的な実施を考えているということは効率的で良いと思うが、分量が多くなるためメリハリを付けることが重要だと思う。そのため、何が論点か、何に意見をもらいたいのかをしっかり示した要約資料が必要になると思う。かなり具体的かつ網羅的な記載に対して聞くという方式で実施すると、回答側が疲れてしまうため、海外のパブリックコメントの例にもあるように、この部分に関する意見を

伺いたいというものを例示的に示すというような工夫が必要だと思う。こうした点を踏まえながら、分野別計画と同時に行うことが効率的で良い。

（小幡委員）

次期計画では、新しい考え方やウェルビーイングなどを取り入れると思うが、こうした要素について意見を聞く工夫が必要であると思う。まんべんなく内容を伺うということは避ける方が良い。

（桜井委員）

市民アンケートについて、現在はその人の行動や思いよりも距離を置いた、一步引いた聞き方になっていると思う。今後は、もう少し踏み込んで主体的な思いを聞ける項目が必要ではないかと思う。例えば、環境基本計画では人材育成が重要であると掲げられており、環境について自ら考え、理解し、解決する力を身につけ、行動に移すということがゴールであるということが施策にも明記されている。そのため、本来であれば、自ら考えているか、理解できているか、解決する力を身につけているか、行動に移っているかを聞くことがこの施策を評価する上では必要であると思う。これまでの内容でも有意義なデータが集まっていると思うが、次のステップを考え、環境教育のゴールを考えると、もう一步踏み込んで自分事になっているのかという設問項目にしないと直接的な施策の評価に繋がらないと思う。さらに踏み込むと、自身がこうしたプログラムに参加したか、していないか、その意欲が高まっているか、という設問項目になっていると、より具体的な評価や改善に繋がると思う。

（小幡委員）

主観的指標については、解釈の難しさもあると思う。市民側に立ったものがあると良いと思うので、次回のアンケート調査に向け、検討いただきたい。

（山口委員）

アンケートについて、その結果をどう活かすのかということも大事だと思う。300人から500人ほどの規模なのだが、左京区で「eco フェスタ」というイベントがある。イベントの待ち行列の際にアンケートを取っており、そのアンケートの中に、「DO YOU KYOTO?」を知っているか、環境によいこと心掛けているか、という問いを聞いている。そのようなアンケートも参考にして頂き、市民の意識の把握に役立てて頂ければと思う。

3 閉 会

（以 上）